

平井一正先生を偲んで

神戸大学山岳会元会長 井上達男

2021年2月15日、先生は帰らぬ人となられた。享年89歳、まだまだ元気に我々後進の指導を願えるものと思っていたが、残念な別れとなった。昨年暮れから入院手術、その後意識をなくされたままお釈迦様が亡くなった同日に天に召された。コロナの影響でお見舞いもできずじまいだったことが悔やまれる。「登山では滅法強かったが、病気には勝てなかった」と告別式で追悼の辞があったが、多くの人がそのように思っているであろう。



2010年9月4日塩見岳頂上

1950年、京都大学山岳部に入部されて以来、国内では積雪期の剣尾根に挑戦されるなど活躍、1958年には京都大学のチョゴリザ遠征に参加、藤平氏とともに頂上に立たれた。最終キャンプから頂上まで、胸まである深いラッセルを終始一人で頑張ったと、学生の合宿に参加された冬の三田原山のテントで昔話に花が咲いたことがある。チョゴリザの稜線でヘルマンブールが残っていたテントを発見してその中を調べられた話は生々しくインパクトのある話題であった。

神戸大学山岳部・山岳会では、1953年以降山岳部長として部員の指導に当たっていた高木正孝先生（マナスル先遣隊、第1次登山隊隊員）が1962年、南太平洋のファッツヒバ島で学術調査中に行方不明になった事件があった。偉大な指導者を失ったところへ、京都大学のチョゴリザとサルトロカンリ遠征に参加という輝かしい経歴を持った平井先生が突然神戸大学に登場された。

神戸大学工学部計測工学科に助教授として赴任されたのは1964年、チョゴリザ初登頂から6年後、サルトロカンリ遠征から2年後のことだった。1965年に神戸大学山岳部の副部長に就任され現役部員の指導に当たられた。

1966年3月、神戸大学山岳部は春山合宿で西鎌尾根から槍ヶ岳を目指して行動中、千丈沢乗越手前で部員が水鉛谷へ滑落する事故があった。先生は捜索隊に参加され、先頭を切って雪崩の恐れをものともせず遺体発見と収容に活躍された。それ以来今日まで神戸大学山岳部と山岳会に深く係わられた。1986年には山岳部部長に、1997年には山岳会会長に就任された。2006年に勇退されるまで労を惜しむことなく後進の指導にあたられた。2000年3月、神戸大学を退官、甲南大学に赴任され、甲南山岳会の方々とも交流された。

1976年、カラコルムのシェルピカンリ7380m遠征では初めての海外遠征隊長として見事初登頂に成功された。また、1986年にはチベット学術登山隊を組織、総隊長としてクーラカンリ7554m初登頂成功とラサから成都への川蔵公路の外国人初踏破を含む多くのテーマの学術調査を指揮された。この隊に参加した中国地質大学(武漢)の学生であった李致新氏は現在中国登山協会のトップとして活躍されている。加えて1988年には先生指導の下、四川省のチェルー山6168mに中国地質大学(武漢)と学生主体の合同登山隊を派遣、初登頂に成功している。登山での国際交流推進は「共に苦勞して築いた友好は

平和への大事な礎である」と常に我々に問いかけられた先生の信念であった。

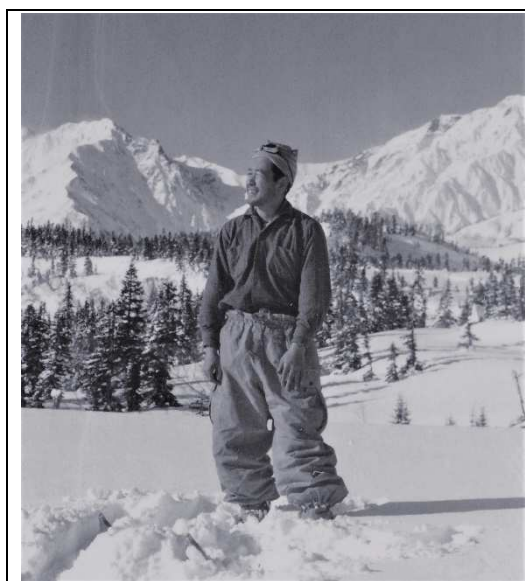


ルオニイ峰 6805m 2009年11月撮影

先生が参加された最後の遠征は2003年カンリガルポ山群、ルオニイ峰 6882m だ。全長 280km の山群に未踏の 6000m 峰が 47 座数えられたが、その最高峰への挑戦であった。残念ながら悪天候と絶望的な山容のために敗退した。遠征当時ご令室が肺癌を患われていたが、そのことを伏せての総隊長としての参加であった。ご令室の葬儀の時に初めてその事実を知らされ、驚愕した。愛妻家であられたので当時の苦悩は計り知れないものであったろうと心が痛んだ。その後、神戸大学隊は2009年に山群第二の高峰、ロプチン峰 6805m に初登頂した。

チョゴリザを皮切りに5回の海外遠征と4回の初登頂に成功されたが、誰一人犠牲者を出すことなく登山人生を送られた。2010年、瑞宝中綬章を授与されたとき、「山で貰ったんと違うで」と自ら弁明されていたが、誰もがやっぱり山に違いないと思ったものだ。専門のシステム工学での功績と大学間の国際交流での実績が評価されたのではあるが。

1972年正月、学生たちが合宿でテントを張っている白馬大池に柵池から先生とスキーで入山した。天狗原までは曇り空で風が少々吹いている程度だったが乗鞍岳の頂上あたりで吹雪となった。視界不良で大池への降り口が全く分からなかった。頂上の標識が出ていたのでそこで地図と磁石で方位を定めて北西に進みだした。南西の風が左手から吹き付けている中しばらく進んだが、それらしい場所が出てこない。これはおかしいと先頭を歩いていた私が立ち止まった。先生は「もう少し行ってみよう」と促された。ものの3分も進んだであろうか。二人とも間違いであると悟った。風は出発時点と同じ角度から左ほほを強く打ち付けていたので方向は正しいと思い込んでいた。もう一度方位を確かめると北東の小さい窪みへと進んでいた。元に戻って今度は無事に大池に着いた。風が地形の影響で西から北へと変化していたの



1972年1月3日 柵池にて

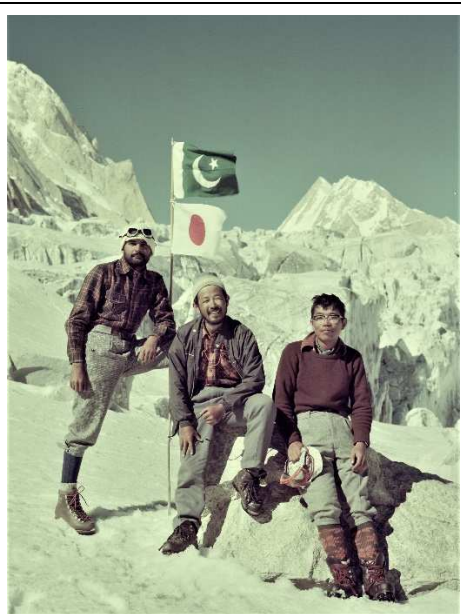
に惑わされてリングワンダリングに陥っていたようだ。間違ったと疑ったらもう少し進んで確信出来たら引き返す、という基本対応でもう少し進むように促されたのだった。こうして教えられ身についた道迷いの対策はずっと忘れることはない。

先生との出会いは1966年、私の神戸大学入学時まで遡る。合格発表とともに即山岳部に入部しようとした矢先、前述の遭難事故があった。入部を躊躇しているとき、「チョゴリザに初登頂したすごい先生がいるから会いに行け」と先輩に言われて研究室を訪ねた。小柄で硬い表情の学者という感じだった。

「山岳部に入部した新生です」と挨拶すると、にこやかな表情に変わって親しく歓談させていただいた。それで山を続ける決心がついた。翌年春に但馬の鉢伏山から瀬川山へのスキー縦走に同行いただいた。華麗なシュテムクリスチャニアで新雪を颯爽と滑降する姿に感心した。これが初めて同行いただいた登山だった。

その後先生は1967年から2年間ドイツに留学されてしばらく疎遠になっていたが、帰国されると神戸大学山岳会に高まりつつあったヒマラヤへの遠征検討に参加された。そしてシェルピカンリの遠征計画が持ち上がった。1974年に第一次隊が派遣され、私は副隊長として参加した。この隊はシェルピカンリ二峰7003mの東稜を6500mまで到達するとともに本峰7380mの登路を偵察して帰国した。

これで次は登頂できると見通しも立ち、先生が本隊の隊長を引き受けられ、準備が進められた。豊富な経験から、何事も適切に進められるので私たちは安心して担当の仕事に邁進することができた。シェルピカンリは技術的に非常に困難かつ危険な山で、いつ事故が起こっても不思議でなかった。隊長である先生は登山中神経をすり減らすような日々をおくっていた。それだけに初登頂に成功したとき喜びは大きかったと同時に「もう二度と隊長はご免だと思った」と吐露されている。



1976年8月シェルピカンリBC
連絡将校とドクターに寄り添われて

1976年6月16日、シヨーク川岸のカパーラからキャラバンが始まった。150人近くのポーターや隊員がザークで川を渡るの半日仕事であった。私は先発隊として谷奥にマッシュャブルムの聳えるフーシェ谷の渡渉を偵察するために先を急いだ。川幅300mに数本の流れができていて膝上までの冷たい濁流が音を立てて流下していた。難なく涉って対岸から引き返しキャラバンの到着を待った。ポーターの先頭集団十数名が元気にやってきたので先導して渡渉し、対岸のキャンプ地ハルディに到着した。遅々として進まないポーターの集団が渡渉地点についたのは午後4時だった。その後、事件が起きた。夕方の増水で流れに足を取られて数名のポーターが流された。何とか助けたものの介抱に時間がかかりその日はキャラバンを止めた。結局ポーターたちは渡渉を拒んでフーシェ谷を溯って橋を渡り二日間かけてハルディにつく羽目となった。隊が集合した夕食後に反省会がもたれたが、先生がいの一番に「ポーターたちの協力なくして遠征は成り立たない。彼らも仲間である。それをよく考えて行動せよ」と叱責された。

私のミスリードが原因であったが、チームワークの欠如は明白であった。その指摘もあったが、やはりポーターも隊の一員であるとの意識が大切であることを思い知らされた。その後隊は引き締め、シェルピカンリの登頂に成功した。先生の隊員たちの安全に対する気配り、危険回避の指摘などを含めて、リーダーとしての能力は素晴らしいものだった。

さて、先生の一旦冷めた未踏峰への熱はシェルピカンリの事後処理が一段落すると再び燃え始めた。当時ヒマラヤの主たる未踏峰はナムチャバルワとクーラカンリが残されていて、世界中の登山家が注目

していた。しかし、この二峰は中国のチベットにあり、しかもインドとチベットの国境紛争地帯に近かった。許可を得るのは極めて無理な話であった。先生は学術訪中団を組織して訪中した機会を利用して中



クーラカンリ 7554m

国登山協会と接触を開始、その後も関係を継続した結果、カンペンチンの許可を取得した。しかし、1982年カラコルムのリモ峰の偵察に出た会員がロロフォンド氷河でクレバスに転落死する事故があった。結果、カンペンチン遠征は消えた。その後カンペンチンは京都大学が登頂した。志を立て諦めないのが先生。中国語の勉強は片時も忘れずに続けるとともにあらゆる機会を通じて中国登山協会と折衝を続けられた。そして1984年、ついにクーラカンリ 7554m の許可を取得された。

2011年8月、もうすぐ80歳の先生から「黒部の赤牛に登りたい。一緒に行ってくれるか」と電話があった。2010年9月には先生が登り残していた3000m峰、塩見岳に同行したが、今回を最後の大きな山行にしたいということだった。太郎平から入山し、雲ノ平を経て水晶岳を越えて赤牛岳に至り、黒部湖に下山する3泊4日の旅だった。私一人では何かの時に対応ができないと考えて頼りになる仲間二人に参加してもらった。先生はゆっくりとした歩きだったが、毎日元気に山を楽しまれた。薬師沢出会の山小屋でビールを飲みながら次なる未踏峰の話題に熱心に語り合ったことが忘れられない。黒部ヒュッテから黒部第四ダムまで、アップダウンと梯子段が延々と続く道はきつかったことと思われる。



2011年8月28日 水晶岳頂上にて

私事だが、「お前の嫁さんは俺が見つかる」と出会いの場をいただいた。待ち合わせの場所がなぜか神戸王子動物園の前だった。紹介されて一分も経たないうちに「じゃあ」とその場を去って行かれた。先生らしいあっけない紹介場面だった。強引さに私はへそを曲げて二三回デートの後、断りを入れた。先生はご立腹でひどく叱られ、出会いの大切さを滾々と諭されたが後の祭り。話は一旦途切れてしまった。彼女の愛らしさに素敵な人だなと思っていたので、じわじわと後悔の念が沸き心を痛めていった。半年ほど

たって彼女から裁判所の絵葉書の入った何も書かれていない封書ももらい、恋心に火が付いた。世話の焼ける奴だと思われたでしょうが、結婚に至り媒酌もしていただいた。先生が媒酌の山屋カップルはみな仲が良い。

山岳会長を勇退される時、「後を引き受けよ。拒否権なしだ。」「やってきた未知への挑戦を継承するのは君の責務だ。」と説得された。偉大なる会長の後を引き受けるのは役不足であったが、有言実行、まずは「未知への挑戦」を宣言し、中国登山協会をはじめお世話になった登山界の方々を招いて「シェルピカンリ30周年、クーラカンリ20周年記念パーティ」を開催し、退路を断った。2009年カンリガルポ山群ロプチン峰6805m、2015年ニイチェンタンラ西山群タリ峰6300m遠征成功を実現できたが、先生のご指導あってのことだ。

出会いから54年、わが人生を決定的に道付けしていただき、兄弟のように接していただいたことに深く感謝している。